

『佐渡四民風俗』の時代

(平成十四年十一月三十日
於 新宿文化センター)

今日は、『佐渡四民風俗』という書物を使つて十八世紀の中頃の佐渡の状況を少しお話しでみたいと思います。この頃、日本の社会は大きく変化しはじめておりますが、そのなかで、佐渡をはじめ日本ではどういうことが起こり、国際的に見てどういうものに興味を持ちはじめたかに重点をおいてお話しすることとします。

この本自体は、既に山本修之助先生の『佐渡叢書』（第十巻）や『日本庶民生活資料』（第九巻、三一書房）として刊行されており、比較的容易に手に入り読むことができます。

この書物が刊行されたのは、いまから二五〇年ほど前の一七五六（宝暦八）のことです。書いたのは佐渡奉行所役人の高田久左衛門という人物です。久左衛門の号は備寛びかんです。宝

『佐渡四民風俗』

暦六年に佐渡奉行として赴任した石谷清昌いしがやせいしようが、佐渡を廻つて見聞記を記せと命じて書かれたということになつております。石谷という人物はのちに田沼意次政權で、今までいう財務大臣になります。田沼意次については説明するまでもないと思いますが、戦前の教科書には城内で息子を殺された男とか腹黒い男とされましたが、いままでは世界的な経済学者とまで評価され、教科書に必ず登場

する人物です。参考までに佐渡奉行にはどんな人物がなるかといいますと、幕末の頃には旗本クラスが昇進、赴任しておりますが、江戸の初期から中期の頃はかなり幕府政治を動かすような人物がやつてきました。この石谷などもその一人で、直轄領として最大の佐渡の実態をつぶさに調べ、のちに幕府の経済政策の大転換を図った人物であります。

高田備寛の氏・素性についてはここでは申し上げません。佐渡奉行所は江戸に出張所を持つていて、毎年、役人が一、三人くらい江戸に行きました。そうして彼らはみんな当時の塾、例えば儒学の林羅山系の塾とか、いろいろな塾へ入門、勉強するのを常としておりました。それで役人のなかには江戸の学者と懇意になるものが随分たくさんおります。これはやはり大名領と異なり佐渡が直轄領ゆえ、行き来が自由であつたためですが、幕末の頃まで江戸のほか京都に割合多く勉強に行つております。明治以降もその傾向があり、この良し悪しは別にして、同じ越後でも佐渡は新発田藩や高田藩とは大分違うところです。高田備寛も江戸で勉強したので、視野の広い人物として育つていつたようあります。

さて、「四民」とは何を指しているのか。私どもは教科書で、四民とは「士農工商」を指し、それは身分の上下関係を示すものであると習い、また教えておりますが、高田がこの本で書いている「四民」はそれとは違います。

十八世紀になりますと、法律上はともかく、既に身分の上下ではなく、士農工商は「職業」を表すものと考えられています。身分ではなく職業であるといったのは、この書物が
出る四十年くらい前の荻生徂徠おぎゅうそらいです。私どもは書物や聞き覚えでは、昔は武士といえば問答無用で人殺しをしても罪には問われない、と習つたけれども、そんなことはありません。武士がいわれもなく百姓を殺めれば大抵の場合死罪になりました。ですから、問答無用というのは私どもの習いすぎでありまして、こういう面では欧米にくらべ日本は割合しつかりした司法制度を持つた国であります。

そんなことで、士農工商というのは職業を表し、武士というのは早い話が行政担当者、市役所の職員であります。それ故、日本の社会は随分と開けたものであります。十八世紀の後半、長崎のオランダ商館付医師として来日したスウェーデン人のツュンベリツュンベリーという人物が著書『江戸参府隨行記』(平凡社、東洋文庫)に、日本の社会についてこんなことを書いております。日本では、「百姓といえども自由に主張することのできる平等社会で、そして立派な国である」と。平等社会だから立派というのではなく、彼は、「ヨーロッパでは農業が駄目になつて國土が荒廃し、外国を侵略して、そこで物を作り、よそに売つて食べている。それに比べて日本は国内農業が豊かで、将来日本は欧米が見習うべき国になるだ

ろう」と言うわけです。私どもは明治以来、何の氣なしに日本は遅れた国だと思つておりますけれども、二百年後の今日の日本をみると、彼の言つたことは、あるいはそうかもしれないなと思わせるところがあります。しかし、いまはご覧のとおり、日本の農業は荒廃しつつありますから、外国へ行つて作物を作り、それをよその国に売つて食べて行こうとする体質は、ツュンベリーが危惧した当時のヨーロッパの体質に非常に似かよつてきているように思います。また、彼の言葉をかりれば、「日本は国土の保全ということをとても重視しており、こういう民族は繁栄する民族である」と、まあ嬉しいことを言つてくれて



ツュンベリー

(東洋文庫、『江戸参府隨行記』)

おります。

さて、「士農工商は職業を表すもの」という考え方を持つようになつたと申上げましたが、この世紀の中頃にもつと過激なことを唱えたのは安藤昌益です。『自然真営道』（一七五五）のなかで、彼は、これから日本が目指さなければならないのは、働く者が恵まれる世の中になることである、と。いまは当り前のことですが、「これからは働く者、百姓や商人の時代がやつてくるぞ」、と当時書くわけですから大変なことを言つてゐるわけです。

ここで、ちよつと聞き置いて頂ければいいのですが、安藤昌益が住んでいた奥羽地方から全国に及んだ冷害のため、いわゆる「天明の大飢饉」（一七八三—一八八）が起きます。そういうときに昌益は、「米（食い物）を生産してゐる百姓が餓死するのは間違つてゐる、政治が悪いのだ。一所懸命に生産をするものが豊かになるような国を作るのが政治の目指すべき事柄である」と若干辛い社会批判をしております。皆さんは安藤昌益と本の名前ぐらいはご存知でしようが、彼の思想はどういう内容ですかと問われたら、大抵答えに窮するのではないかでしようか。（これは教え方が悪いこともあるので、私も教師の端くれ、毎度のことながら反省を込めて申し上げておきます。）

さて、こういう次第ですから、高田備寛は、この『佐渡四民風俗』（以下、「四民風俗」）

で職業としての四民という視点からいろいろなことを説いておりますし、百姓のこともたくさん記しております。

まあ、これが通史ですと、「行政」の項目といえば奉行所の仕組みが最初に記されるのが普通ですが、この本にはそんな仕組みのことなどは一つも出てきません。「昔の武士はこういう風情をして歩いていた。最近では中身のない奴等が着物だけは良いものをして、ぞろぞろ籠に乗っている。一体これは何たることや」と叱つてゐる。当時、こんなことを書いてよくもまあ佐渡奉行が咎めなかつたかと思うくらいです。そして、「今の武士の有様、自分が子供の頃は武士のおかみさんも羽田（相川）の浜へ魚を買いに行つた。けれども最近規則がうるさくなつて武士のおかみさんは直接浜へ買物に出られない。それで下男を遣わせ、武士の面目を保てと言う。これは間違つてゐる」と記すのであります。

さて、なぜ「四民風俗」が書かれることになつたかを考える場合、大きな理由が二つ挙げられます。一つは、佐渡で大きい百姓一揆（寛延の一揆）が起きたこと、もう一つは、宝暦五年に飢饉が起きたことです。私どもは、飢饉だとか一揆が起きたといいますと、天気が悪く不作で起きたとか、百姓が圧制に対して騒ぎを起したと短絡して考えてしまうクセがあります。しかし、歴史をみると面白いことに、百姓一揆が起きたときというのは、

特定の時代に偏つております。飢饉にしても同様です。ある一つの飢饉だけを述べるときは、その年の天気が悪かつたとか、秋にたくさん雨が降つたとかで片付けられますが、例えれば三年おきに起りますと、天気の循環説やら二十年凶作説など怪しげな説が唱えられるようになるのが普通です。つまり、飢饉にしろ一揆にしろ、物事が社会的に起きてくるとは考へない。ですから、飢饉が何故起きたかを説明する場合、私どもは日照り続きだつたとか、虫が立つたとか天候不順だとかを教科書で習うだけで、世の中がどういう風に動いていたか、社会との関わりについては関心さえ持たなかつたというのが本当で、これは大変な間違いであつたと考えます。

そこでこれから、この書物が出来る頃の日本——勿論佐渡で宜しいのですが——佐渡の人たちが何をテコにしてこの世の中を見るようになつていて、少しお話してみます。

ここで、寛延の一揆についてくどくど申しません。おさらいのつもりでお聞き下さい。

首謀者は山田村（佐和田町）の本間太郎右衛門です。八幡（佐和田町）の国府川辺りから新町（真野町）の方の浜辺（国道の西側）に松林がありますが、一七五〇年の前後にそこに五万本の松の木が植えられました。江戸の初め頃はそこは砂原で、飛砂で新町方面へ

向うと行き倒れになる者が出たため、国仲の百姓を動員して柴垣が結われました。享保の最後は辰年、次の元文元年は巳年、この二年をかけて太郎右衛門が中心になり松を植えて防砂林とし砂地を畠に開墾して、辰巳村（佐渡博物館の辺り）をおこしました。村の人たちはここで野菜を作り、それを相川へ売りにいきました。皆さん、「八幡あねご」という言葉を聞いたことがありましたようか。昔の本に、八幡の姉さんたちが野菜を入れた重い籠を背負うて遠く相川まで売りに行つた姿が描かれ、こう呼んだのです。苦労して商売しているので、よく言えば経済（金銭）についてはしっかりと、悪く言えばケチです。私の金沢村あたりでは八幡の人とは付き合うなどやつかみ半分で評しました。八幡ではどこよりもとりわけ瓜類が早く採れました。私などは八幡芋は里芋のことだと知ったのは上京してからです。里芋のことを日本中、八幡芋と呼んでいるのだとばかり思っていました。その昔、相川へ売りに行つたおばあさんたちの話を聞くと、朝の四時には家を出て、相川で全部売つてから昼飯を食べるという風で、商売に精を出していました。大正の終りから昭和にかけて、籠を背負う代わりに車が立つようになりますと、一人で沢根（佐和田町）の質場しちばまで荷車を引いて行き、そこから坂道になるので人を雇い車を押させて相川まで行く。帰りは空荷ではなく、相川で人糞肥を買い、肥やし桶に積み込み山を越えて沢根まで押して

もらい、あとはまた自分で引いて帰る。金沢村では、こういう様子を「あたりめ（米）」の肥やしめー」と揶揄しました。肥やしの錢は引き取る側と引き取つてもらう側が交代している。いまは肥やしを汲んでもらう方がお金を出すけれども、昔は人糞尿は貴重な肥料でしたから錢を出して買わなくてはならなかつた。このように一揆の起きる頃、八幡は売ることを目的に野菜を作りそのお金で生活するという生産・消費のパターンになります。

いまじやそんなことは当たり前のようにみえますが、私どもの小さい頃はそうではなく、自家消費して余つた分を売りましたが、いまは最初から売ることを目的として生産しています。江戸時代の百姓の基本は、自分の家で役に立つものは自分の家で作り、余つたものを売るということです。いまの農家は自分の家で食べるものは作らないでよそから買い、全部売るために作つております。それを私どもは「発展」だと思つてゐる。（この間ドイツから大勢視察に來たので、何を習いたいかと尋ねたら、「日本の農家では普通自分の家の畑に、ささげや人参など三十種類以上の自家用野菜を作つてゐるというのでそれを習いたい。これからドイツの農業をそういう方向に持つていきたい」と言つてゐる）

いまの日本では自分の家で食べるものはみんな買いますし、私の家などは米だけを作つて売り、ほかの食料は全部農協で買ひます。しかし、ドイツ人はそう考えずに、自分の必要なものは自分

の畑で作ろうというのが二十一世紀のあるべき農業の姿だと考えるわけです。歴史は繰り返すといいますから、あるいはそういうこともあるかも知れません）。

さて、佐渡でいまお話しました太郎右衛門のように、それまでとは違った考え方のものが現れています。皆さんも自分の生活の有り様、生産の有り様で人々の考え方が変るということを身近に時々感じておられると思います。私の例で言いますと、父は生前東京に居る私の弟を愛しておりまして、味噌や米など送つておりました。長男の私は、「親父、なにもそんなもの送らんでもいい」と言うと、「あれは勤めていて水まで買わねばならん、もつけねえ」。冗談じやない、私の方がよほど貧乏しているのに、と思いましたね。電気や水こそ送らないが、昔の人は物を子供に送つてあげるのが親の務めだと錯覚している。たつた二、三十年でこれだけの考え方の違いが出てくる。皆さんも子供のことを思い出して下さい。大抵、親から見れば子供はズレつ公になつて、言うことを聞かない。これはなにも本人の不勉強とか育て方には何の関係もない。時代がそういう考え方を育てるんです。

太郎右衛門が提出した一揆の訴状を見ますと、一揆の理由は単純です。一揆の起ころ十年前、享保の頃、幕府は百姓との間に税金を定免制という定率法に決めます。ところが三十年も経たないうちに幕府は今度は出来高でいくことにしてしたので、実際、寛延の頃

には増税になつてしまふ。百姓は約束違ひをなじりますが、幕府は法律を盾に応じない。

こういう野暮なことつてありますよね。いまの年金問題もそうじやないですか。政府が財政が苦しいから来年から年金は廃止すると言つたら、ざわざわするでしよう？　だつて、私どもも勤めの頃は年金相当額を天引きの形で積んでおり、本来なら自分の名前で積まれておくべきものです。それを年金を貰う頃になつて、ちつと減らすぐらいならともかく、支払わないといえれば皆さんどうしますか。約束違反だと謀反の一つも起したくなるんじやないですか。一方、いまの若い者に言わせると当面自分の納めるものを他人に使われるのは嫌だ、という。じやあ、私らがこれまで納めたのはどうなつたかといえば、政府が公共投資にみんな使うてしまつて無い。これは大変なことだと思います。一揆というのは、百姓が幕府に背いたといふ事は確かなのですが、一揆が起きるといふのは単に百姓が困つて一方的にやつたのだと決めてかかるのは間違いです。百姓は理不尽なことは言いません。

約束違反を追及され、理屈のうえでも幕府は非常に困つた立場になります。訴えに行つた太郎右衛門は結局死罪になりますが、幕府は彼らが訴状を出す直前に、徒党を組んでの訴え（越訴）を禁ずる法律を作り、法律違反で処罰したわけです。江戸に上つた時、幕府の内部事情に詳しい「郷宿」^{ごうやど}の人たちにいろいろ訴え方などアドバイスを受けますが、徒党

禁止の法律もあり、幕府が彼らの言い分を聞く前に死罪は明らかでした。これは幕府のやり方が悪いわけであります。こういうことを経て時代の考え方が変ってきます。宝暦の飢饉で佐渡では二七〇〇人くらいの餓死者が出る。不作であつたのに年貢を負けなかつた。

横山村（両津市）と猿八村（畠野町）で百姓が減免等を頼んでも拒否される。「二六〇ヶ村のうち二四〇ヶ村は納めているのだから借りてでも納めよ、そうしないと正直者が馬鹿を見る」といわれる。一見もつともな理屈で、いまでも政治家がわりかし使うセリフです。

ところが石谷が奉行になつてから方針を変える。百姓がこれだけ餓死しているのを黙つてみていいるは奉行所の役人の間違いである、と指摘します。だから石谷が百姓の味方かといえば、そういうことでもない。これはやはり時代の精神が變るということです。丁度この変わり目に「四民風俗」という書物が現れました。高田備寛は石谷に命じられ、一年かけて佐渡中の村を回つて見るわけですが、その結果、何がわかつたか。見聞し現地で感じたことは、即ち政治はどうあらねばならぬかについてであり、彼は一応の見識を持つようになりました。これが書物のできた背景です。

さて、私どもが毎日生活していくうえで、日本のことばかりじゃなくて世界がどういう

動きをしていいるかについて関心を持つ必要があります。戦前戦後を通じて、日本の歴史を習つた人たちは世界の動きに疎くなつております。これは明治の教科書編纂の欠点でありますて、世界の歴史は世界の歴史、東洋史は支那のことばかりで日本との関係が書かれておりません。しかも教える先生まで別々という誠に不思議なことになつております。だから、日本史でいえば、世界の出来事が日本にどんな影響を与えたかについてまるで無頓着です。例えば、江戸時代は鎖国だったので外国との関係が途絶えていた、というのは間違いです。外国との行き来は密接であります。十七世紀の終わり頃来日したドイツ人のケンペルという人物がおります。彼は『江戸参府旅行日記』(東洋文庫)を著わしているのでご存知の方もおりましよう。彼は免状をもつた本物の医者であります。オランダ商館付医者は沢山おりますが、本物は三人しかおりません。あとは「床屋医者」といつて、歐米では手巧者な者が医者になります。あちらでは馬に蹴られた怪我人を手術するとか、商館員で乗船中に足を折ったとか腕を折ったとかの外科の手当程度で済み、多少のことがあつても命に別状ないですから、一番手巧者な者、カミソリと鉗を持ってる床屋が医者として来るんです。幕末の頃来日したシーボルトなどは、教科書では、彼は長崎に来て鳴滝村の塾で医学を教えてくれた大恩人ということになつておりますが、それは嘘です。彼は日本人

に医学を教えないことに全力をあげた男で、むしろ悪い奴だと思います。佐渡にもたくさん門人がいる眼科の土生玄碩などは、要求された禁制品を贈つて漸く教えてもらつたものの、処罰を受けております。まあ、アメリカのペリーを開国のお恩人と書くくらいですからシーボルトのことをそう書くのも不思議じやないですけどね。ペリーはインドから船隊を組んで日本を植民地にしようとして来ましたが、シーボルトを雇い日本のことをいろいろ尋ねます。シーボルトは日本を植民地にしても何の「価値」もないと教えたのでペリーは止めたんです。どうして価値がないと考えたかは後ほど申し上げます。

さて、一六九〇年（元禄三）、先程のケン・ペルという人物がなぜ日本にやつて来たのか。幕府の探索で、彼は日本を植民地にする価値があるかどうかを考えて来日していることがわかりました。オランダの手先です。彼は来日以来、今村という通訳の息子を使い日本に関する知識を吸収し、文献のほか沢山の植物を蒐集します。それをまとめたのが「日本植



土生玄碩



シーボルト

物誌」です。日本ではシーボルトやツュンベリーのような人物を博物学者と呼んでおりますが、植物に詳しく、あらゆる知識を備えている人を指した、明治の人間の言い方です。いまの人たちに博物学といつてもなじみは薄いでしょうし、我々も生物学と同じだ、ぐらいに思つておりますが、そうではない。

なぜ彼らが植物を求めて世界をわたり歩いたかというと、例えば、どこかの国でゴムの木を見つける、そして南の国的人はそれを長靴にしているのを見て、「オオこれはいい」とオランダ人が目をつけた。オランダのライデン大学には、いまでも広大な植物園を持つている。日本の大学は勉強するための学校ですが、ヨーロッパの大学は植物を通じて植民地を獲得するために作った学校で、目的が実にはつきりしております。日本の大学は皆さんご存知のことおり、弁当を持って学校に行きさえすれば卒業免状をくれます。これは確かにイイことなんですが、ヨーロッパの大学では役に立たないことはやりません。そのことを私はもうだいぶ前のことですけどソ連で実感しました。ソ連のある大学の農学部で、木を切るのに日本から輸入したチェンソーを回し、それが出来れば卒業できる。日本のように機械の原理がどうとか、回転がどうとか理屈を全然こねない。切ったものを少し仲間と加工し作り得れば、それで農学部は卒業です。



ベルツ（肖像）

明治に東京大学医学部の先生になつたドイツ人のベルツは、「日本人は根本になる科学的精神がない、彼らは技術を小手先でこねているだけである」と酷評している。ちなみに彼の奥さんは日本人で、名は花子。彼の家には鑄金家の初代本間琢斎が贈つた鑄金がありましたし、日本の一番の高弟は両津に来て医者をやつた竹中成憲です。

ケンペルに話を戻し、コーヒーの木を例にしてお話しします。この木をアフリカからライデン大学の植物園に移植し、温度調節などをして三年か五年かけて育て、どこかの土地に合うように改良します。それを船に積んでボルネオのようなところに運んできて現地に栽培を勧める。コーヒー豆がとれれば全部高い値段で買いましようという契約を結びます。

植民地というのは、その国がイヤだというのに武器を使つて懲らしめて作らせるのではありません。そんなやり方はなく、相手の国を喜ばせておいて自分が儲ける、それが植民地にする（になる）ということです。日本人は植民地に非常に弱いから、今日でもアメリカごときに植民地同様に扱われておりますが、本当は腹を立てなければいけないところです。慣れっこになつているのか知らないのか、言いなりになつてている。このケンペルは、植物

では日本に大したものはないという風に判断した。これがコーヒーの木に相当するものが
あつたら大変なことになつていていたと思います。彼の日記を読みますと、注目しているのが
「艾（もぐさ）」です。ヨーロッパの灸は皆日本から入つてゐる。ヒットラーは死ぬ直前ま
でお灸をやつていたという話もあります。日本人はお灸がとても好きですが、いまじやあ
ちらの方が盛んなくらいだそうです。孔子は病気になつてからじやなくて健康な時にこそ
灸をすえよと勧めております。この灸の原料は「もち草」ですが、ヨーロッパ人はそれを
どこかの植民地で作らせたりはしなかつた。作るより日本で買つた方が早いとすぐにあき
らめます。日本には大した植物はないといつて外国へ原料を持って行つて製品化し、別の
国へ輸出するか、あるいは原材料を輸入して製品化することは日本では適さないと考えた。

余談ですが、エジプトなんかひどいもんですね。エジプトは自分のところで作れるのに
小麦をアメリカから買つてゐる。そうしないとアメリカが自分のところのバナナを買つて
くれない。近くのトルコは世界第三位の小麦生産国で、そこから買えばいいのにと思いま
すが、安くても買わない。アメリカとはそういう関係になつております。こういうことは
世界という舞台に目を移してはじめてよくわかります。日本はわりかし世界を見なかつた
んですが、日本人は植物を薬にするという、いわゆる原材料から加工までを非常にうまく

やつたらしいんです。だからヨーロッパの人は日本から出来上がった製品として艾を買い、よその国で売ろうと考えたのです。当時の日本人はこのケンペルの動きをちゃんと見ており、ケンペルが帰国すると幕府は江戸城内に植物園を開園（一七二一年）しました。佐渡奉行所も享保の頃、相川に一〇坪ほどの植物園を開き薬草を栽培させます。ここからまたちよつと面白いのですが、幕府は、ケンペルが植物を集めたがっているのを見て「一体何の為に日本に来ているのか神経を尖らせました。日記に、「日本人は我々の行動に異常なほどの関心を示した」と記されています。異常なほどといいますけどもね、幕府の要人としては、彼らが単に植物の標本を作るために来日しているわけじやないことを察知し、彼らの意図するところを見抜くのが応対する者の務めですからね。それでケンペルが薬草に関心を持つていることが分かったわけです。

先日、どなたかの本で、江戸時代は世界の植物を使った「植物帝国主義」の時代だと言っているのを読んで面白い表現だなあと思いました。いまならさしづめ工業製品ですが、江戸の頃は、植物で世界を支配できた時代です。その後、赤ひげ先生こと桂川周甫は、ケンペルの植物採集がきっかけで江戸・小石川に薬草園（のちの植物園）を開きます。そこで何を栽培したか一つだけ挙げますと、朝鮮人参です。その種を朝鮮から対馬藩経由でや

がて佐渡や日光など幕府直轄領へ配布され、栽培されるようになります。なぜ私がこの人參を引き合いに出したかというと、あのポルトガル人やスペイン人は植物を自國ではなく、主として植民地へ持つて行つて作り売つたのに対して、日本人は外國から買うものを自分のところで作ればお金が外國へ流れ出ないで済む、と考えた。これはすごい発想で、とても日本人らしいと思つたからです。ツュンベリーの書物には世界が日本をどのように見ているかが記されております。それによると、「日本は豊かな国という印象を受け、われわれヨーロッパから見ると非常に国土保全に力を入れていることがよくわかる。そして自国の資源を自分たちの生活のために最高度に利用している民族は豊かである。例えば金、銀、鉄の細工など緻密で到底ヨーロッパ人の及ぶところではないし、木材を紙として使い、しかも地方に独特の紙がある」という風に書いております。紙を例に、「地方独自の紙がある」というのは文化そのもので、あらゆるもの資源として利用する点で日本ほどの国は多くないであろう」と述べております。こういう見方をするのは彼が当時のヨーロッパの実情を見ているからでしようね。スペインなんかも農業が全部駄目になつて荒廃し、農業などは馬鹿のやることくらい考え、自分たちは新しい産業に乗り出し世界に伸びていくのだという方向に転換した。まあ、農業を馬鹿にしたというより農業以外にもつとやるべき事が

ある、という風に考えたんでしょう。そういう点では今日の日本と似通つたところがあり、私のようなドン百姓の子孫としては農業軽視にいささか抵抗を覚えます。国が発展するのなら何だつていいじゃないかと言えば、それはそうかもしけないけれども、日本の国土は荒廃の一途であることをどう考えるのか。先ほどのツュンベリーは、日本人は国土の保全に心を碎いていると述べている。例えば、洪水は避けられませんが、日本人は河川の氾濫に対して知恵を働かせております。川が氾濫する場合でも、氾濫させる場所をところどころに作り全面決壊を避ける工夫をしております。こういう人知が昔から日本には集積されております。しかし、科学を過信したため、絶対大丈夫といわれた昭和大橋が新潟大地震（昭和三九年）で壊れてしまう、こんな例は最近多いですね。そうして災害が起きたと、予想外の雨量だったと言わないと国民が納得しないので、だんだんそういう説明になつてくる、これは責任逃れです。昔からちゃんと防いできたものは、本来防げるものであつたはずです。このような説明の仕方は、なにも土木工学に限らずいろんな分野でされています。日本は、国土保全という面では世界でも図抜けて行き届いた国です。例えば田圃なんていうものは、よその国では肥料をやらないとすぐ採れなくなつてしまふが、日本じや毎年米を作つても同じように採れ、千年来やつてきている。我々は無造作に考えますが、田

園は水の保全の最たる施設で、ヨーロッパの人を見たら凄いと思うに違いありません。だから、ツュンベリーは日本の自然は農業で守られていると見るわけです。私どもは、いま自然愛護などといいますが、全然かまわないので放つておけば自然は豊かになるという考えは間違います。人間が関わってきた、もつと言えば人間が利用することによって自然が守られてきました。ですから、今日、自然保護団体などが保護を言う場合は、「自然に入るな」というような仕掛けになってきて、自然と人間との間に衝立を設けるような感じがあつて、ちよつとどうかなと思います。基本にあるのが排除の論理なんですね。先日、佐渡の岩百合をどうしたら守れるかという会議があつて聞いていると、柵を作つて立入り禁止にして保護すればいい、それに海府（両津市）にあるカンゾウも同じようにして保護するんだと言ふ。けれども、かつては春に野焼きをし、牛に食わす萱などの草を刈つて手入れをしたから植物は豊かだつたんです。最近のように、構わないで「カンゾウ祭り」の時だけお金を取るようなことをしているから、だんだん減つてくる。農家の人は昔から、萱というのは刈ると育つのを知つてあります。海府に行つて聞くと、いまは牛の草を刈らないから使える萱も刈らなくなつた。だから、強くなつた萱を野焼きして煙害でも発生したらどうしよう、というようなことばかりを市の偉い人が心配する。それで、カンゾウ祭りをやるた

びに観光客は増えるが花は減るということになる。ですから、ツュンベリー流に言えば、人間が自然をどう利用するかが、自然が豊かになるかどうかの分かれ目になる。国土の保全というのは、牛を飼うための草を刈るという農業の例が示すように、全てがうまく「循環」していたことにはかならないわけです。

一七三五年（享保二十）に佐渡へ野呂元丈等、幕府の四人の医官が薬草の実地調査にきて、薬草二十四種を指定しました。今日この薬草の名を挙げることはしませんが、一番有名なのは「蒼朮（おけら）」です。飲んでみたわけでもないんでしょうが、幕府の医官たちは勉強していく、何の症状にはどこの地域のどの薬草が効くということをよく知つております。日本では佐渡の羽茂にだけ採れる「おけら」で、佐渡のこれこの薬草が効くと挙げられている中の第一番です。原種は中国の四川省だそうですが、どうして佐渡に生えるのかまだ分かりません。

先日、佐渡中学時代の先輩の青木さんが「エーザイ」（製薬会社）の植物園の経営をしているので見学してきました。武田薬品やエーザイなど大きな製薬会社には大抵植物園があるそうです。ここでは三十町歩の畑にいろんな薬草を栽培している。彼は、「戦後の強い化

学薬剤、いうなればBHCやDDTのよう、要らないものは何でも退治してしまう類いの薬剤はなくなり、これからは必ず植物医学の時代が来る。病気でも何でもないときに飲んで健康を保つ薬、そういう薬の時代がやってくるでしょう」といつておりましたが、私も同感です。病気になると劇薬を服用するような薬方、つまり、直ぐ効くもの——その最たるもののが注射——を飲む、いいかえれば病気になつてから薬を飲むというのがいまの時代です。佐渡でも宝暦の頃（一七六〇年頃）になると薬草栽培が奨励され、相川の問屋が買い入れるようになります。

ところで、佐渡は病気の治療に関しては日本でもかなり早いペースで進みました。そのきっかけというものが大事で、寛文年間（一六七〇）に相川金山で「よろけ」と言う鉱山病が発生したことです。「よろけ」というは、風通しが悪いため鉱石の粉塵や灯明の油煙が坑内たちこめるため金穿り大工がむせて仕事が出来なくなつてしまふ病気です。いわゆる「珪肺」です。坑内の大工だけにみられる症状で、これをきっかけに、病気は鉱山での作業、労働に原因があつて起きるのかもしれないと考えるようになりました。病気を原因から考えて治療するという考えが生れたのです。それまでは病気はみんな神様が起すもの、疱瘡には疱瘡の神様がいて、崇め信心しないと起すものと考えておりました。例えば、寛文年

間の頃、疱瘡の神様は赤いものが嫌いというので、佐渡では「赤ベベ」（赤い着物）に変えたり、麻疹になりそだつたら吉井（金井町）の大聖院の仁王さんの股くぐりをさせる。もつと言えば、同じ頃、松ヶ崎（畠野町）の河内の百姓が相川に赤い牛を曳いて行き、子供に股をくぐらせることを商売にしていたという話が残っております。そういう風に物事を考えていたのが、この頃になつて、鉱山に入っている者だけが何か特定の病気になることを発見したのがきっかけとなりました。かつては、病気は山伏などがご祈祷して治すものでした。佐渡は、いまは交通安全でお守りをつけますが、越後のようにお守りを飲んだりはしません。病は神仏からではなく原因があるからだと考えるのが、佐渡は他国より五〇年も早く、これは大変なことだと思います。越後ではいまでも、護符が配られている。魚沼では「御鳥枢沙摩」おうすさまという便所の神様のお札を書いてもらい貼ておりますが、書いている人だって、いま時分なんでそんなことをしているのか、わからないでやつてている。

佐渡の海府あたりで「蘇民将来」そみんじょうらいの子孫だから「蘇民将来の家」と張つているところがありますが、貼つている本人が大体なんだかよく判らないでいる。この手のことは、佐渡は早くから姿を消しました。

佐渡には、江戸時代に他所へ勉強にいっている医者が大変多い（詳しくは本集「長谷川

元良と竹中成憲」参照）。日本で最初に全身麻酔による手術をした和歌山の華岡青洲のところへは三十人位行つております。これはなにも佐渡の人間が医者好きだからじやなくて、病気は原因があつて起きる、原因に関わつて治療することが必要とわりかし早くから考えていたからでしょう。京都で天皇の侍医になつた中山元亨げんこう、水戸公の侍医横地玄常よこちばんじょうという具合に大勢おります。本人の偉さもさることながら、物事の発生を原因として考えるクセがあつて、薬に対する関心が強かつたからでもあります。

皆さんは、佐渡の家の庭にある花は眺めるためにあると思つてゐるでしようけど、そうではない。佐渡では薬用として植えたのです。例えは、水仙は薬として植えられている。花は美しくても毒になるもの、トリカブトなどは植えておりませんし、リンドウやウツギは植えないことからもお分かりでしよう。枇杷は実を食べるばかりじやなくて葉はリュウマチの特効薬として、また、ヤツデの葉も煮汁はリュウマチの薬効があるとして植えられたんですよ。

このところ病院史編纂のため佐渡病院で仕事をいるので、医者にどうしたらリュウマチが治るかとざつくばらんに尋ねたら、基本的には治らないと言う。患者として診察を受けねばそれは言わないでしようけど。ところが、民間ではあの枇杷の葉つぱを風呂に入れて

二、三年も続ければリュウマチには罹らないといわれているらしいです。昔はいろいろな植物を煎じて飲むことで病気を防いできました。しかし、いまの薬とどつちがいいかは一概に言えないことも確かでしよう。薬にはそういうところがある。佐渡病院を建てる重要性を説いたベルツの弟子竹中成憲は、土地には土地の医薬品、つまり、土地には土地の病気に効く薬になる植物が必ず植えられている、と明察している。キニー・ネはマラリアがあるところに限って生えている。いまの『家庭の医学』という本には、「体の具合が悪くなつたら家にある薬は使わないで、すぐ医者にかかり」とある。癩病については「癩病菌による大変重い病気だから、それと診断されたら隔離し、外に出ないようにして外側から暖かく見守ろう」とある。おかしいほどいい加減なことが書いてあります。昔から蜂に刺されたらすぐ朝顔の花か、南天の葉っぱをもんでもつけるかすれば、腫れはたちどころに引くと教えられているけれども、いまはそれを一切やりません。蜂に刺されたらすぐ医者へ行きましようという処し方にしておりますから、手遅れになつて死ぬ者まで出てくる始末です。朝顔が本当に効くのか保証の限りではありませんが、昔は蜂で死ぬなんてことはめったになかつた。いまはすぐアンモニアの何倍液かを付け医者にかかることになつてるので、運び込まれてもまごまごすると氣を失つたりする。ですから皆さんには、田舎の庭にある薬

草が花を見るために植えてあると考へては駄目です。水仙や南天などが便所の傍とか門口に植えてある訳を知らないで生きていけるのは幸福なようでもあるが、実はとても不幸なことと言わなければなりません。



『農業全書』

先程のエーモンの植物園の後、十七世紀の終り頃に『農業全書』を著した宮崎安貞みやざきやすさだを訪ねて福岡に行くと、彼が勉強したという部屋も残つておりました。この書物の名は高校の教科書に必ず出てきますし、薬草のことがいっぱい出てきます。彼がどういう勉強の仕方をして薬草などを知ったかというと、同じ村の貝原益軒の影響です。彼らはオランダ商館員等が江戸へ行くのを見ておりますのでその動向が風聞として耳に入り、やがて薬草のことに関心を持つてくるんです。益軒が

宮崎に貸したのは、支那の『農業新書』という書物で、宮崎はそれ読んで自分の考へをまとめて、先程の書物を著したのだそうです。外に目を向け、借りた本をきっかけに、今まで考えもしなかつた薬草のことに関心を持ち、日本版を書いたというのは興味あることだと思います。

私は、先程の竹中成憲が言うように、佐渡の植物で家に植わっているもので、救急のと

き、すぐに利用できるものぐらいは調べておいた方がよいように思います。栓^{ひいらぎ}やハリセンボンはとげがあるのでハシカ除けになるという類いはともかく、せいぜい中風になりそうなときは南天のあるところに走れ、くらいのことは覚えておこうかなと思います。こういうふだんの注意をしておくのがこれから大事になつてくる気がします。佐渡病院にいた川辺という医者は母親にこんな手紙を書いている。「毎朝、ゲンノショウコとドクダミを煎じたのを飲み、朝晩三十づつの灸をする。体が弱い自分はそのお陰で病気をしたことがない。しかし、自分の健康法を笑う部下がかえつて病気になつていて」。彼によれば薬というものは健康な時にこそたしなむべきものであるという。私もこの考え方には何かやつてみようかと考えております。皆さんもこれから、「病気になつたら」の考え方ではなく、病気にならないように、日頃何か工夫して薬をたしなむようになつたらいいのではと思しますし、そういう時代になりつつあるように感じます。

以上のようにみてくると、『佐渡四民風俗』の時代が少しづつ見えてきます。時代の変化が高田備寛の歴史（世の中）を見る目を変えているのです。

『佐渡四民風俗』の読み方を変える必要があります。私たちはややもすると、歴史書を

過去の知識として学ぶ手がかりとしてきました。しかし、「四民風俗」には変りつつある世の中、人々がその世の中をどう見ているのかが語られているのです。

十八世紀の後半には『解体新書』が翻訳され、高野長英ら新しい時代を担う科学者たちが登場してきます。佐渡からもたくさんの医者たちが京都や江戸に出かけるようになります。そういう時代の息吹を読み取ることもまた、大切なことのように私は思うのです。

(了)